体験学習としてのタウンウォッチング（街あるき・里あるき）を効果的な学びの機会とするポイント！

タウンウォッチング（まちあるき）※は、私たちの日常の中で体験から何か物事に気づいたり学んだりする過程をひとつの教育手法として構造化した体験学習法をベースにしています。体験学習法を用いた学習場面では、多くの場合個人やグループの状況を観察しながら適切な働きかけや情報提供を行い、学習促進を図るファシリテーターと呼ばれる立場の指導者の存在が重要となります。

本プログラムでは、その役割をしくみとして組み込むことで学習が促進されるようにデザインされています。このしくみを十分に機能させるために理解しておいていただきたいポイントを以下に示しました。

※「体験学習としてのタウンウォッチング（まちあるき）の基本的な考え方」についてはティーチャーズ・ガイドにコラムとして掲載しております。あわせてお読みください。なお、子どもたちの生活する「場」の街と、住民が暮らす「場」のかやぶきの里を総称し、平仮名で「まち」と表現しています。

1．まちをのぞく窓の大枠（テーマ）もさることながら、それに沿った適切な小枠（視点）を用意する

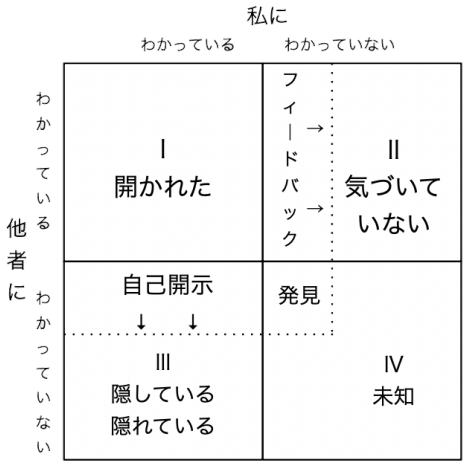
テーマを設けて「さぁ、見てきましょう！」では「何を見たらいいんだろう…？」と戸惑ったり、テーマとは無関係に“目新しいもの”や“面白いもの”等に目が行きがちです。“何について（テーマ）”、それを“どう見るか（視点）”をある程度示してあげることが重要です。本プログラムでは、どこからまちをのぞくかを“窓”にたとえ、その大枠（テーマ：持続可能な暮らし・サステナブル）と小枠（視点：持続可能な地域の評価指標を参考にしたもの）を窓を模したワークシートに落とし込んでいます。とりわけ視点の設定が重要であり、

① 見る人の主観（モノの見方や考え方）が反映される
② お勉強臭くない
③ テーマに沿って、モレなくダブりなく
④ 当事者の視点を反映させる（インタビューを盛り込む）

という５点を考慮しています。

2．里あるき体験を通じての気づきを促すコミュニケーションの場面を大切にする

体験学習における気づきや学びのメカニズムを説明するものに“人間関係における気づきの図解式モデル”ともいわれる“ジョハリの窓（心の四つの窓）”がありますが（右図）、学習者の気づき・学び・人間的成長は学習者を取り巻くさまざまな人や状況との関わりを通じて起こるとされています。その意味では、里あるきを共にする他のメンバーやインタビュー相手、教師との相互コミュニケーション（自己開示やフィードバック）によって起こるということです。



出典：「人間関係トレーニング」ナカニシヤ出版

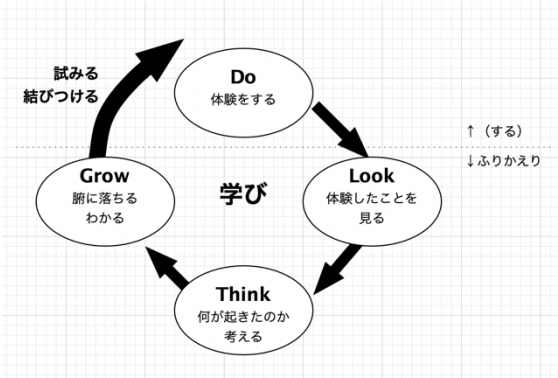
したがって、

① グループの共同作業が促されるようにワークシートはグループに１枚ないしは２枚にする
② 小枠にインタビューを入れる
③ 里あるき後のグループあるいは全体でのふりかえり･わかちあいを欠かさない
④ 可能であれば事後学習としてグループのまとめ作業、クラス全体での発表やその後のふりかえり、わかちあいを大切にする

ことをオススメします。

３．体験学習の循環過程をまわす

窓の大枠（テーマ）、小枠（視点）に沿って「まち（街・里）」を見てみる、見てきたものや、その際感じたこと等を体験を共にする他者と話し合ってみると無意識のうちに様々な気づきが起こります。しかし、往々にしてやったことや、表面的な面白さや楽しさに目が行きがちですが、学習という意味ではその気づきに光をあて、個人やグループの学びや成長につなげる必要があります。そのためには単に体験するだけでなく、右図のように、そのことを各自がちゃんとふりかえり、そこでの気づきを整理する、またそれを周りの人たちとわかちあ学び合うそのサイクル Do（やってみる）→Look（観てみる）→Think（考えてみる）→Grow（まとめる、次を考えてみる）をまわすことが肝要です。



2023 年 1 月
©一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会
制作：Tao 舎　制作協力：川島憲志
本書の全部または一部を無断で複写・複製することは著作権に基づき禁じられています。